

表紙の“人” Mr.フィギュア

今月の一言

サンクをもとーリョーシカ!



アエロフロート便で、モスクワへ約10時間、その後国内線でカザンに向かう。マトリョーシカ工場見学ツアーで、妻、長男と一緒に初のロシアの旅である。機内、ロシアの女性CAと通路をすれ違うと、立派な体格と威厳ある態度。万が一ハグする機会があっても、ちよつと萎縮しそう。

今回の旅は、去年公開された映画「神聖なる一族24人の娘たち」の舞台、ヴォルガ流域のマリエル共和国やマトリョーシカ産地を訪ねる珍しい企画だが、そもそもものきっかけは東京アートのブックフェアで沼田元氣さんとお会いしたこと。沼田さんは1980年代、盆栽パフォーマンズで一世を風靡した小生憧れのアーティストで、今も写真家詩人、マトリョーシカ研究者と幅広く活躍している。当時

のピカピカの印象はさすがにちよつと消えてしまいましたが、なぜか以前にお会いしたかの如く親近感がわき、話が盛り上がるうち、誘われ、妻もマトリョーシカ好きで、この不思議な旅を即断したのです。

現地に着けると、まずはイスラムとロシア文化の混じるカザンを巡り、マリ民族の屋敷、博物館に。全体に寂れた木造家屋が並び、塀、壁、窓枠に鮮やかなブルー、グリーンの違い色が奇抜さを醸し出す。日本人は珍しいようで、熱烈な歓迎を受ける。身長も同じくらいの民族から笑顔が溢れ、マリ風シチューやパイを食べながら踊りや歌を披露された。こちらも動作を交えての、「幸せなら手をたたこう」の歌でお返し。ラストの投げキッスで大盛り上がり。

余談ですが、トイレ事情は驚き

であった。古いトイレを民族的資産で残してあるとはいえ、床に切り込みがあるだけ。男女それぞれに、なぜか2つ。二人でするのか？

そういえば今年2月に行った北フィンランドでも小が2個と大が1個、同じ部屋に。これもいまだに疑問である。普通の学校、レストランには現代風の洋式トイレがあるが、田舎だからか便座が無い。普段からスクワットで鍛えておかないと長時間は無理。我々が日常使用する便座は不特定多数の人が座るから、どちらが清潔とはいえ

ないが、やはり座って用を足したい。もちろんウォシュレットなど皆無。ドアは壊れ電気はつかずでこれが大国かちよつと不安に。

マトリョーシカ工場を尋ねると、旋盤で手際よく白樺や菩提樹から型を抜く職人、可愛らしいエプロン姿で絵付けするマトリョーシカのような体形の中年婦人たちが。生き生きと働く姿に独自文化を創作する誇りを感じました。小生、絵付けを体験させて頂いたが、「就職しないか」と褒められた。冗談とはいえちよつと嬉しかった。

Mr.フィギュア 本誌の表紙に登場した一見あやしい、どこか可愛い、中年男性。愛犬チャーチルとはいつも一緒。その正体は、実在するビジネスマン恒川憲一氏をモデルに作られたフィギュア。月刊正論の表紙とこのコラムで、厳しく優しく、ダジャレをオシヤレに織り交ぜた温かいメッセージを、読者のみなさまに届けている。

恒川憲一氏 つねかわけんいち クリイター。株式会社シーエムバー代表取締役社長。大阪芸術大学デザイン科を卒業後、広告代理店勤務を経て独立。15年間、絶えずフィギュアを持ち歩き撮影し、ダジャレを考えている。このコラムの真の執筆者。著書に『フォックス』、一息(セルバ出版)。



最終日は寝台列車などで13時間かけモスクワへ。美術館のような駅に驚き、赤くない赤の広場に(赤は美しいという意味らしい)。このロシアを代表する Gum百貨店の有料トイレ、大理石に包まれた豪華。150ルーブルをカードで支払う。シャワートイレは追加料金。ゆっくりいらないと損な気分。たった数日のロシア経験だが、これだけの大国を一つにまとめるのは苦労しそうだと思った。ちよつとロシア通になったし、次はサンクトペテルブルクやエストニアのタリンも訪ねたい。

てなこと突然ですが、小生 Mr.フィギュアは今回限りで長い旅に出ることになり、皆さんとお別れです。せいぜい諸君も人生を謳歌してくれたまえ! あくまでも急がばマトリョーシカ! でね。